

氏名	ヤマ ナカ ワカコ 山 中 和佳子
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第219号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉戦後日本の音楽科教育におけるリコーダーの導入と指導の史的展開—小学校における器楽指導を中心に—

総合審査委員

(主査)	東京芸術大学	准教授	(音楽学部)	山下 薫子
(副査)	〃	教授	(〃)	佐野 靖
	〃	〃	(〃)	塚原 康子

(論文内容の要旨)

本研究の目的は、戦後日本の音楽科教育においてどのようにリコーダーが導入され指導が展開されてきたのかを器楽指導を中心に明らかにし、音楽科教育におけるリコーダー指導の意義と課題を指摘することにある。

現在小学校で一般的に個人持ちとされている楽器の一つであるリコーダーには、教育用楽器のみならず、専門的な知識と技術を駆使して演奏される楽器、家庭音楽や愛好家のための楽器という3つの側面がある。このことから、リコーダーが児童の学校内外における音楽活動を繋げ、現行の学習指導要領が目指す生涯を通して音楽を愛好する態度を育むこと、即ち「音楽の生活化」を可能にする楽器であるといえる。それでは、これまでの音楽科教育は、リコーダーの多様性や特性を十分に活用してきたのだろうか。音楽教育の関係者は、リコーダーの特性をどのように認識し児童の「音楽の生活化」を支えようとしてきたのか。今後のリコーダー指導の在り方を見据えるためにも、音楽科教育におけるリコーダーの導入と指導の史的展開をとらえ直し、継承すべきことや問題点を浮き彫りにする必要があると考えられる。

本研究ではこれらの課題意識から、学習指導要領の内容と、その背景にあった音楽教育界の動向、楽器開発、音楽科教科書、教師の実践という視点に基づき、文書資料及び聞き取り調査の内容をもとに考察を進めた。

第1章では、昭和20年代に焦点を当て、学習指導要領の内容と「たて笛」の特徴及び教科書におけるたて笛指導の内容と合奏教材の特質、さらに実際の指導にはたて笛の導入が困難であった実情を明らかにした。

第2章では、日本のリコーダー開発の過程に着目し、リコーダー開発のきっかけの一つとなった戦前の「木笛」(リコーダー)試作の目的が、「木笛」演奏を通じた音楽聴取と「音楽の生活化」にあったことを明らかにした。次いで、昭和30年代の様々なリコーダー開発の経緯を明らかにし、楽器会社が現場の教師の意見を取り入れながら改良していたこと等を指摘した。

第3章、第4章では昭和30年代に焦点を当て、器楽合奏形態の模索とリコーダーの導入を検討し、教師たちによる「作音」のとらえ方の相違や、教科書の合奏形態とリコーダーに対する位置づけの二極分化等を指摘した。さらに、当時のリコーダー指導の先駆者であった3人の小学校教師が、リコーダー指導によって基礎的な音楽能力の育成や「音楽の生活化」を目指していたこと等を指摘した。

第5章では、昭和30年代後半から昭和50年代前半の日本の音楽教育界及び音楽界の動向に着目し、合奏形態とリコーダーに対する教師たちの認識の変化及び深まりを指摘した。

第6章では、昭和40年代半ばから昭和50年代における2つの学習指導要領と教科書及び実践現場に着目し、合奏形態と合奏教材における編曲方法の定着及びリコーダー指導の多様な展開とその特質を明らかにした。

以上を踏まえて、戦後日本の音楽科教育におけるリコーダーの導入と指導の史的展開の特質として3点指摘した。

1. 音楽科教育のリコーダー指導には、楽器産業による楽器開発と民間におけるリコーダーの奏法や指導法の研究及び音楽界におけるリコーダーを取りまく動向が大きく影響しており、これらが指導内容の深化と多様化を促した。
2. 昭和40年前後における作音楽器としてのリコーダーの再認識を契機として、リコーダーの音を聴き取ってそれを演奏に生かすことにより、音を聴取し表現する能力を育む指導が展開されるようになった。
3. 今日のリコーダー指導の基盤は、昭和40年前後におけるリコーダー指導の大きな転換期を経て、昭和50年代における合奏形態の定着とリコーダー指導の内容の充実及び多様化によって形成された。

次に、リコーダー指導の意義と課題を「音楽の生活化」の観点から2点指摘した。

1. 音楽科教育のリコーダー指導が児童の現時点のみならず将来の音楽活動を支える基盤となるという考えは、一部の教師からは指摘されてきたが、第1次から第5次学習指導要領と音楽科教科書にはこれに基づいた指導内容は明示されてこなかった。リコーダー指導を通して音楽を愛好する心情を育てるためには、児童の将来の多様な音楽活動との関わりをも視野に入れた「音楽の生活化」が目指されるべきである。そのためには、冒頭で示したリコーダーの多様な側面を連関させ、それを基盤として現在の音楽科教育におけるリコーダー指導の内容と方法を再検討することが必要であろう。
2. 音楽科教育でリコーダーを指導することにより、世代を超えたリコーダーアンサンブルが可能になるということは、ほとんど指摘されてこなかった。学校と家庭を結び、同世代だけでなく異なる世代をも繋ぐことのできる楽器としてリコーダーをとらえ直すことにより、音楽科教育におけるリコーダーの学習を家庭及び社会における音楽活動へと発展させていくことができるであろう。

(総合審査結果の要旨)

「戦後の音楽科教育におけるリコーダーの導入と指導の史的展開」と題する論文の審査を行った。本研究は、戦後日本の音楽科教育において、リコーダーがどのように導入され、どのような経緯をたどって指導され続けてきたのかを明らかにし、今日における意義と課題を導き出すことを目的に行われたものである。リコーダー指導の歴史にかかわる研究は、多くが特定の年代やトピックを対象を限定したものであるのに対し、楽器開発や音楽界、民間における研究動向等を踏まえ、昭和20年代から50年代までの指導の実際を浮き彫りにした点に、本研究の独創性がある。

本研究の特徴と学術的成果は、次の3点にまとめられる、①リコーダーを「教育用楽器」としてのみとらえるのではなく、「専門的な知識と技術を駆使して演奏される楽器」、「家庭音楽や愛好家のための楽器」としての側面をも積極的に認めて論を展開している点、②史資料の収集と分析にとどまらず、楽器開発に携わった人物や先駆的な実践を行った教師たちへの聞き取り調査を行って、その史的展開、とりわけ昭和40年前後のダイナミックな転換期を、リアリティをもって描き出している点、③「音楽の生活化」の観点から、リコーダー指導の意義と課題を指摘している点。

審査会では、「音楽の生活化」とは何か、それを学校教育の継続性、あるいは社会教育や家庭との連携の中でどのように実現するのかについて、議論が集中した。また、「音楽の遊戯性」等のリコーダー指導の理念にかかわる考察や、音楽界及び楽器産業との影響関係についての更なる検討が必要であること、章構成の根拠が不明瞭であることについての指摘もあった。

しかし、緻密な作業と多角的な検討に基づいて、リコーダー指導の基盤が形成されるまでの道筋を明確に示した功績は大きく、音楽教育分野の課程博士にふさわしい、極めて優れた論文であると認め、全員一致で合格と判断した。